クリスマス・ドロップ作戦25終了：太平洋の島々にホリデーの喜びと支援物資を届ける

OCD25 wraps up: delivering holiday cheer, supplies to Pacific islands

Jan. 5, 2026

By Senior Airman Samantha White
374th Airlift Wing Public Affairs

グアム・アンダーセン空軍基地発ー2025年12月14日、グアム・アンダーセン空軍基地において「クリスマス・ドロップ作戦2025」が終了した。

本作戦は今年で第74回目を迎え、戦争省が実施する人道支援空輸任務としては最も長い歴史を持つ。今回は米国、カナダ、日本、韓国が参加した。

作戦では、約270個の支援物資コンテナをC-130ハーキュリーズ輸送機に搭載し、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国、パラオ共和国に点在する59の遠隔島嶼に住む、約5万6,000人の太平洋島嶼の島民に生活必需品が届けた。

今年のクリスマス・ドロップ作戦では、人道支援の範囲が拡大され、新たにマーシャル諸島共和国の島々も支援対象に加えられた。

クリスマス・ドロップ2025作戦統括監督官を務めたニコラス・ウェストリック大尉は、「クリスマス・ドロップ作戦の本質は、人が人を助けることにある。何千マイルも離れていても、思いやりでつながった隣人のために行動すること。そして、国家や文化、地域社会間のパートナーシップを示すことなのです」と語る。

本作戦は、緊急性の高い支援物資を提供するだけでなく、乗員の訓練強化、同盟国間の相互運用性の向上、さらには地域の安定と人道支援即応態勢を支えるパートナーシップの強化にも寄与している。

第374航空遠征航空団の一員として第36空輸中隊を率いたマシュー・ブホルツ中佐は「チームワークは書類の上で築かれるものではない。共に飛行し、計画し、課題を解決する中で築かれるのです。今年も、複数の国の乗員が連携し、あらゆる挑戦に対応できることを証明した。4か国の隊員が共に飛行する姿は、単なる人道支援に留まらず、パートナーシップが実際に機能していることを世界に示している」と述べた。

クリスマス・ドロップ作戦2025を通じて、第374航空遠征航空団は、日本からグアムへの太平洋空軍の戦術空輸能力を展開し、島嶼部全体にわたる機動的戦闘展開を実証した。

第374航空遠征航空団司令官ネイサン・パウエル大佐は、「インド太平洋地域は、世界で最も自然災害が発生しやすい地域であり、世界全体の自然災害の40％以上を占めている。そして被災者の約80％が、この地域に集中していると推定される。戦域内の同盟国やパートナーとダイナミックな空中投下を訓練することで、共通の目的を共有し、支援する地域社会との信頼を強化しつつ災害発生時の即応態勢を維持することができる」と語った。

クリスマス・ドロップ作戦2025の成功は、国際同盟国との強固な関係と協力体制の証であり、各国間の絆を更に強める結果となった。